

事務局だより

令和 2 年度 (2020 年度) 炉物理部会運営委員

氏名	役職	所属
辻本 和文	部会長 (任期 2 年)	原子力機構
北田 孝典	副部会長 (任期 1 年)	大阪大学
名内 泰志	庶務幹事 (任期 1 年)	電力中央研究所
亀山 高範	部会等運営委員会担当運営委員	東海大学
高木 直行	編集委員会担当運営委員	東京都市大学
多田 健一	HP 担当幹事	原子力機構
方野 量太	HP 担当幹事	原子力機構
奥村 啓介	HP 担当幹事	原子力機構
山本 健士	財務小委員会担当幹事 (任期 1 年)	原子燃料工業
谷中 裕	財務小委員会担当幹事 (任期 2 年)	原子力機構
郡司 智	編集小委員会担当幹事 (任期 1 年)	原子力機構
家山 晃一	編集小委員会担当幹事 (任期 2 年)	三菱重工業
Van Rooijen Willem	セミナー小委員会担当幹事 (任期 1 年)	福井大学
巽 雅洋	セミナー小委員会担当幹事 (任期 1 年)	原子力エンジニアリング
高木 直行	セミナー小委員会担当幹事 (任期 2 年)	東京都市大学
山路 哲史	セミナー小委員会担当幹事 (任期 2 年)	早稲田大学
三木 陽介	セミナー小委員会担当幹事 (任期 2 年)	テプコシステムズ
阿萬 剛史	学術交流小委員会担当幹事 (任期 1 年)	テプコシステムズ
相澤 直人	学術交流小委員会担当幹事 (任期 2 年)	東北大学
遠藤 知弘	学術交流小委員会担当幹事 (RPHA 担当)	名古屋大学
横井 公洋	学生・若手小委員会担当幹事 (任期 1 年)	日立製作所
渡邊 友章	学生・若手小委員会担当幹事 (任期 2 年)	原子力機構

編集小委員会からのお願い

部会報に対するご意見・ご要望などがございましたら、編集小委員会までお知らせ下さい。また、部会報の記事として、「部会員の声（自由投稿）：内容不問で自由に投稿・意見を述べられる場」を常時募集しております。また、部会ニュース（炉物理部会ホームページに掲載）の投稿もございましたらお知らせください。

編集小委員会（部会報）担当幹事連絡先

日本原子力研究開発機構	郡司 智	gunji.satoshi74[at]jaea.go.jp
三菱重工業	家山 晃一	koichi_ieyama[at]mhi.co.jp

[at]はアットマークと読み替えて下さい。

炉物理部会員の名簿は、日本原子力学会の名簿に基づいて作成しております。学会名簿は、部会報の郵送、部会メーリングリストの発信先などに使用されます。登録情報（勤務先、Eメールアドレス等）に変更がある場合には、速やかに日本原子力学会に登録情報の変更手続きをお願いいたします。

## 編集後記

炉物理の研究第 73 号の発行に際し、ご多忙中にも関わらずご執筆をご快諾いただいた部会員の皆様に深く御礼申し上げます。

特集 1 では、シリーズ「巨匠炉物理を語る」として、マサチューセッツ工科大学の **Kord S. Smith** 先生に寄稿いただき、先生の長年のキャリアを振り返ることで近代ノード法による軽水炉炉心計算の変遷とその方法論について理解が深められる大変興味深い内容ですので、ご一読いただければと存じます。

特集 2 では、「デブリ臨界安全」をテーマとした秋の大会の企画セッションのフォローアップセミナーの内容について、学術交流小委員会担当幹事からの寄稿をいただきました。姿の见えない燃料デブリについて共通認識を持つことが出来る内容になっております。

受賞記念寄稿では、学会賞、部会賞それぞれ 1 件ずつ受賞者に寄稿いただきました。これら素晴らしい研究成果を励みに、今後も受賞者に期待したいと思います。

ご存知のとおり、昨年度末から拡がる新型コロナウイルス感染症により、今年度の国際会議のほとんどは中止もしくはオンライン開催となりました。炉物理部会の夏期セミナーも中止となり、代替案としてプロセッシングコード **FRENDY** のオンラインセミナーを企画いただきました。部会員以外の参加も可能でしたので、その開催経験や感想をまとめていただきました。前記フォローアップセミナーも含めて、今年度のオンラインセミナーの開催経験は今後の部会活動に資するものと存じます。

今月で 2011 年 3 月 11 日以降の福島第一原子力発電所事故から 10 年を迎えました。この未曾有の原子力災害に対して、事故直後の情報のなさ、見通しのない事故終息に嘆き、現地で環境線量を測定したときの数字の高さに天を仰いだことなどが昨日のここのように思い出されます。また、我々専門家が正しく情報を発信しないことも一因となり、市民の分断が止まらなかったこと、忸怩たる思いがあります。10 年後の現在、廃炉作業も地域の再生もまだまだ緒についたばかり。新しい人財を育てていく必要は誰もが認めるところです。この春、大学に進学する方は事故当時小学校低学年。あの時何があったか、何が原因だったか、を次世代に正しく伝えていく責務を感じる昨今です。

部会報「炉物理の研究」の発行に関しまして、今後とも変わらぬご支援ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和 3 年 3 月

編集小委員会担当幹事

日本原子力研究開発機構 郡司 智